

**科学研究費助成事業 研究成果報告書**

平成 30 年 6 月 23 日現在

機関番号：23601

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2017

課題番号：26463385

研究課題名(和文)入院中の乳児に付き添う母親の母乳育児支援プログラムの実施と評価

研究課題名(英文) Implementation and evaluation of breastfeeding support program among mothers who accompany their hospitalized infants

研究代表者

塩澤 綾乃 (Shiozawa, Ayano)

長野県看護大学・看護学部・助教

研究者番号：20551435

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,800,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は小児病棟に勤務する看護者の乳児に付き添う母親への母乳育児支援の認識と支援の実際を明らかにすることを目的とした。N県内の3医療施設の小児科入院病棟に勤務する看護スタッフ91名を対象に自己記入式調査を行った。調査内容は、付き添い中の母親への母乳育児支援に対する認識と実際に行っている支援であり、分析は割合による比較と自由記述の内容を質的帰納的に行った。看護者の93.0%が母乳育児支援は必要と考えていた。支援内容は授乳時のプライバシーの配慮、母親の体調面への配慮、乳房トラブルの有無の確認、乳汁分泌状態の確認などがあった。72.1%が母親への関わりでの難しさを感じていた。

研究成果の概要(英文)：The present study was conducted to investigate the awareness and support of nurses working in pediatric wards that provide breastfeeding support for mothers with infants. Self-administered questionnaires were distributed to 91 nursing staff working in the pediatric hospital wards of three medical facilities in N Prefecture. The survey asked questions pertaining to the awareness of breastfeeding support for mothers and the actual support provided. The analysis was done by comparing ratios and qualitatively and inductively analyzing the content of answers to open-ended questions. 93.0% of nurses considered breastfeeding support necessary. Support included giving consideration to privacy during breastfeeding and the mother's physical condition, and examining the presence or absence of breast problems and the state of lactation. Of the nurses, 72.1% experienced difficulty in interacting with mothers.

研究分野：看護学

キーワード：入院中の乳児に付き添う母親 母乳育児支援 小児病棟看護師の認識

1. 研究開始当初の背景

世界保健機構 (WHO) は、生後 6 ヶ月までの完全母乳育児と母乳の栄養的な利点と感染に対する防御力の恩恵を受けるため、少なくとも 2 歳までは、母乳育児を続けることを勧めている<sup>1)</sup>。乳児が何らかの疾患で入院した場合でも、母乳栄養が禁忌となる医学的理由がない限り、病児への母乳育児は可能であり<sup>2)</sup>、人工栄養と併用して搾乳を与えることや、水分制限があっても哺乳量を測定しながら直接授乳ができる。治療により母乳栄養が中断している場合は、母乳栄養の再開に向けて、搾乳により母乳分泌を維持する必要がある。母乳は新生児や乳児にとって栄養源であると同時に感染防御作用、抗アレルギー作用などのメリットがあり、母親の健康面では乳がん、卵巣がんの罹患率の減少、次回妊娠時の合併症を予防できるなどのメリットもある<sup>3)</sup>。さらに、母乳育児が母子相互作用を通じて、母と子の絆を強めるのにきわめて重要な働きをする<sup>4)</sup>と言われており、児の入院中でもできる限り母乳を与えることが母児にとって有益であると考える。

現在、入院中の乳児の母乳に関する研究では、NICU スタッフまたは NICU 入院中の児の母親に対する母乳育児支援<sup>5)</sup><sup>6)</sup><sup>7)</sup><sup>8)</sup>であり、小児病棟付き添い中の母親が対象となっている研究は見当たらない。また、入院患児の付き添い家族に関しては、ニーズや負担感に関する実態調査<sup>9)</sup><sup>10)</sup>、疲労の軽減に関する研究<sup>11)</sup><sup>12)</sup>、付き添う母親の疲労に対する支援の質的向上を図るための看護介入の視点を明らかにする研究<sup>13)</sup>が報告されているが、これらの研究の対象は児の年齢が 0 ~ 10 歳以上の母親と幅広く、付き添い中の母乳育児に着目した研究は見当たらない。

研究代表者は、平成 24 年度から 2 年間挑戦的萌芽研究において、入院中の乳児に付き添う母親の母乳育児の実態と母乳分泌維持促進のセルフケア行動を明らかにするために、N 県内で小児科入院病棟を有する医療施設 3 施設に入院中の、1 歳までの乳児に付き添う母乳育児中の母親 50 名に質問紙調査を実施した。その結果、全員が今後も母乳栄養の継続を希望していたが、50.0%の母親が母乳分泌量が減ったと自覚していた。また、90.0%の母親が、付き添い環境に対する不便を感じていた。母乳育児への困りごとには、【落ち着いて授乳や搾乳ができない】【乳房状態の変化への対応が難しい】【子どもに必要な栄養が与えられているか不安】があった。母乳分泌維持促進のためのセルフケア行動では、76.7%の母親が熟眠感を得ておらず、

活動時間や食事時間が短かった。食事バランスでは主菜、副菜、乳製品、果物の摂取が目安を満たしていない状況であった。さらに、母乳分泌量が増えたまたは変わらない群と減った群の属性、付き添いの状況および健康状態について比較検討を行なった結果、母乳分泌への影響が考えられる要因では、睡眠時間および健康状態の比較における、「体調がよい」「熟眠感がある」「疲労感がない」「ストレスを感じない」の全ての項目において有意差が認められた。母乳分泌量の変化別にみたストレスの内容では、母乳分泌量が減った群の母親の方がよりストレスを感じていることが明らかとなった。以上より、付き添い中の母親の母乳育児を継続するためには生活環境の整備と専門的な支援が課題と考えられた。

また、付き添い状況下での母乳育児に対する認識および母乳分泌を維持促進するためのセルフケア行動に影響する要因について、母親へのインタビュー内容を現在質的に分析中である。その結果を踏まえて、具体的レベルでの看護支援内容を検討し、実践することが喫緊の課題である。

2. 研究の目的

本研究の目的は、小児病棟に勤務する看護職に対する母乳育児支援プログラムの実施と評価により、入院中の乳児に付き添う母親の現状に即した母乳分泌維持促進および母乳育児継続のための看護支援構築のための示唆を得ることである。

3. 研究の方法

母乳育児支援学習会開催に向けてプログラム内容を検討するため、N 県内 3 医療施設の小児病棟に勤務する看護職者 91 名に母乳育児支援の知識と実際に行っている支援について、研究者が作成した自己記入式調査用紙を用いてアンケート調査を行った。調査期間は平成 27 年 12 月 ~ 平成 28 年 1 月。調査依頼書および調査用紙は病棟師長に配布してもらい、封入して投函とした。返信にて調査に対する同意を得られたとした。

調査項目は、1)属性：年齢、資格、臨床経験年数、小児病棟勤務年数、産科または NICU 勤務経験および勤務年数、母乳育児支援プログラム参加経験の有無および参加回数と内容、2)付添中の母親への母乳育児支援の必要性の認識、3)母親から母乳育児や乳房トラブルの質問をされた場合の対応の認識、4)必要とする母乳育児支援の知識、身につけるにあたっての課題とした。

分析方法：質問項目の単純集計を行い、自由記述は内容に共通性がみられるも

のを集約し、質的帰納的に分析した。

#### 4. 研究成果

##### 1) 結果

調査用紙の回収率は48.4%，欠損回答1部を除く，43部を分析した。対象者の平均年齢は34.0±10.0歳，資格は看護師42名，助産師1名，小児病棟勤務年数平均6.4年，産科またはNICU勤務経験有り25.6%，母乳育児支援プログラム参加経験有り4.7%であった。

93.0%が母乳育児支援の必要性ありと認識しており，その理由は「母親への支援も小児看護の一部である」「乳房トラブルに速やかに対応したい」「直接母乳が未確立なまま入院するケースに支援が必要」「母乳育児における母親の不安に対応したい」「母乳育児により母子の愛着形成が促進されると思う」であった。母乳育児中の母子に配慮して行っている支援内容は「落ち着いて授乳・搾乳ができる環境の提供」「乳房状態を気にかける」「母乳育児が継続できるための働きかけをする」「母親の心身の健康維持への配慮」であった。

母親から母乳育児や乳房トラブルの質問をされた場合の対応の認識では，対処方法を助言できる25.5%，乳房観察ができる27.9%，母乳産生や分泌維持に影響する要因を詳しく助言できる25.5%であった(図1)。

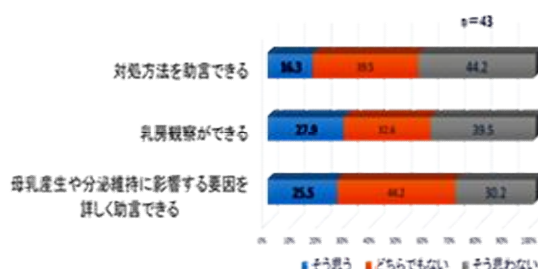


図1. 母乳育児や乳房トラブルの質問をされた場合の対応の認識

必要とする母乳育児支援の知識では，母乳育児や乳房トラブルの対処方法が74.4%，乳房トラブルを相談された時の観察法53.5%，効果的な授乳の方法51.2%，母乳産生や分泌維持に影響する要因34.8%，卒乳アドバイス23.3%であった。知識を身に付けるにあたっての課題では，研修会に参加する機会がない(9件)，母乳育児支援の時間が確保できない(5件)，支援の実施に自信が持てない(3件)であった。

##### 2) 考察

看護師は多忙な業務の中でもできる範囲で支援を行っており，母親も看護の対象と捉えている。岡田ら<sup>14)</sup>は，小児看護の役割は，家族を含めた疾病の予防，成長・発達，心身の健康の保持・増進，社会化への

支援であり，看護の対象は小児およびその家族，特に親が重要な役割を担っており，家族と家族構成員の健康状態は関連していると述べている。本研究においても看護師は，母親の意思を支えることで，愛着形成や親子関係の確立を促す重要な役割を担っており，母子のウェルネスの向上を目指していると考えられる。しかし，母親から母乳育児や乳房トラブルを相談された場合，観察および助言できる看護師の割合が低いという結果から，支援に自信が持てず，実際に行っている支援内容が浅いため，知識を身につける必要性を感じていると同時に，母親に正しい情報やケアの提供が必要との責任感が生じていることが推察される。このことから，看護師の課題として，母乳育児に対する母親の不安や乳房トラブルへの対応，直接母乳確立に対する支援内容を深め自信をつけることがあげられるが，知識を身につけるにあたっての課題との間に葛藤があると考えられる。

以上より，小児病棟に勤務する看護師に対して，母乳育児支援の学習の機会を提供する必要性は高く，多忙な業務の中で看護師ができる範囲での支援内容を検討する必要がある。具体的内容として，すでに実施できている支援内容の強化，母親への精神的サポートの仕方，母親から相談を受けた時の乳房状態の観察方法，産科助産師への対応依頼の見極めの目安などがあげられる。

今後の展望として，本調査で導かれた結果をもとに，看護師向けの母乳育児支援学習会のプログラム内容の詳細を検討するとともに，看護師が母親に対して母乳育児支援を実施した際の評価方法も検討し，プログラムの有用性を検証していく必要がある。

#### 文献

- 1) 米国小児科学会編，平林円訳(2005)，母乳育児のすべて，メディカ出版，大阪，p4
- 2) 笠松堅實，周産期の栄養と食事，周産期医学第35巻増刊号，東京医学社，p617-619，2005
- 3) 後藤清美，吉松淳，宮川勇生，周産期の栄養と食事，周産期医学第35巻増刊号，東京医学社，p215-218，2005
- 4) 仁志田博司・進純郎，産科スタッフのための新生児学，メディカ出版，大阪，2007
- 5) 渡辺めぐみ，樋口善之，松浦賢長(2009)，母子分離状態における母親の搾乳回数・搾乳量と産後1ヶ月の児の栄養法との関連，母性衛生，p125-131，第50巻1号，2009
- 6) 藤本紗央理，横尾京子：早産児の母乳保育における電動搾乳機の有効性，日本新生児看護学会誌，p2-10，第15巻2号，2009
- 7) 横尾京子，中込さと子，村上真理：ハイリスク新生児の母乳育児支援 看護師の認識からみた電動搾乳器の活用に関する

課題, 日本新生児看護学会誌, p25 - 34, 第9巻2号, 2003

- 8) 江南宣子, 脇田満理子: NICU における母乳育児支援活動の試み, 奈良県立医科大学医学部看護学科紀要, p58 - 62, 4巻, 2008
- 9) 山道弘子, 千葉千景, 蝦名麻美, 中村由美子, 子どもの入院に付き添う母親の負担感と母性意識に関する考察, 第38回日本看護学会論文集(小児看護), p240 - 242, 2007
- 10) 江森寛子, 和田尚子, 入院患児に付き添う家族の負担, 第35回日本看護学会論文集, p18 - 19, 2004
- 11) 小林八代枝, 西村あをい, 小野敏子, 西田みゆき, 尾崎正子, 柏崎麻衣子: 小児病棟における付き添いおよび面会家族の疲労の実態と支援策の検討, 第36回日本看護学会論文集(小児看護), p213 - 215, 2005
- 12) 小林八代枝, 西村あをい, 小野敏子, 西田みゆき, 尾崎正子, 柏崎麻衣子: 小児病棟における付き添い家族の疲労に関する支援, 第37回日本看護学会論文集(小児看護), p312 - 314, 2006
- 13) 廣井寿美, 古屋敦子, 森早苗, 高木由美子, 阿久澤智恵子, 相澤康子, 矢嶋恵美子, 飯塚もと子, 付き添う母親の疲労に対する熟練看護師の介入の視点, 日本小児看護学会誌, Vol. 20 No. 1 p62 - 69, 2011
- 14) 岡田洋子, 荃津智子, 井上由紀子, 草薺美穂, 小児看護学~小児と家族への系統的アプローチ 第2版, 医歯薬出版株式会社, p100, 2010

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者, 研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計0件)

〔学会発表〕(計1件)

塩澤綾乃, 清水嘉子, 佐々木美果, 阿部正子, 藤原聡子, 西村理恵

小児病棟に入院中の乳児に付き添う母親の母乳育児支援に対する看護者の課題の認識  
日本母性看護学会, 2016年6月17日~2016年6月18日, 久留米市, 石橋文化センター

〔図書〕(計0件)

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

名称:  
発明者:  
権利者:  
種類:  
番号:  
出願年月日:

国内外の別:

取得状況(計0件)

名称:  
発明者:  
権利者:  
種類:  
番号:  
取得年月日:  
国内外の別:

〔その他〕  
ホームページ等

#### 6. 研究組織

##### (1) 研究代表者

塩澤 綾乃 (SHIOZAWA Ayano)  
長野県看護大学・看護学部・母性助産看護学  
分野・助教  
研究者番号: 20551435

##### (2) 研究分担者

清水 嘉子 (SHIMIZU Yoshiko)  
長野県看護大学・看護学部・母性助産看護学  
分野・教授  
研究者番号: 80295550

##### (3) 連携研究者

藤原 聡子 (FUJIHARA Satoko)  
長野県看護大学・看護学分・母性助産看護学  
分野・准教授  
研究者番号: 00285967

阿部 正子 (ABE Masako)

長野県看護大学・看護学分・母性助産看護学  
分野・准教授  
研究者番号: 10360017

西村理恵 (NISHIMURA Rie)

長野県看護大学・看護学分・母性助産看護学  
分野・講師  
研究者番号: 30413214

佐々木美果 (SASAKI Mika)

長野県看護大学・看護学分・母性助産看護学  
分野・助教  
研究者番号: 80620062